

第37回 江戸川乱歩賞受賞作

連鎖

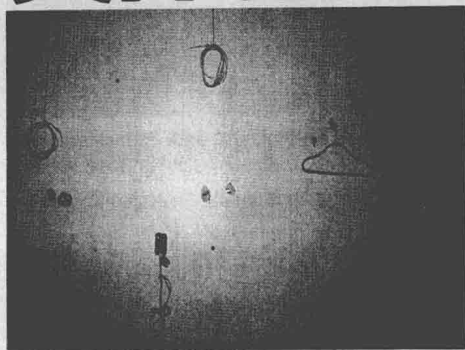
真保裕一



第37回 江戸川乱歩賞受賞作

連鎖

真保裕一



講

談

社

連鎖

一九九一年九月一〇日 第一刷発行

著者 真保裕一

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二―郵便番号一三二
電話 〇三 五三九五―三五〇五(編集部)

〇三 五三九五―三六二二(販売部)

〇三 五三九五―三六一五(製作部)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価 一二〇〇円(本体一六五円)

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取替いたします。なお、この本に
ついてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部あて
にお願いいたします。

© Yuchi Shimpō 1991 Printed in Japan

ISBN4-06-205577-5

(文2)

連鎖

装帧／龟海昌次

一九九〇年 三月五日

電話が鳴っていた。酔い潰れてベッドに倒れ込んでから、まだ五分と経っていない。

午前二時に私の声を聞きたいと思うような友人など一人もいないはずだし、こんな時間に呼び出さなくてはならないほど、私を必要としている職場でもない。安否を気遣ってくれる家族親戚の類はそれこそ一人もない。ベルが鳴ること自体が珍しいことだった。

私は、六日前からひとつの電話を待っているにはいたが、正直すぐに受話器に手が伸びるようなものではなかった。手が受話器を探ったのは、酔いの回った頭に、ベルの音が耳障りだったからに外ならない。

思っていたより酔いが回っていたらしい。受話器を取り損ねて、チーク張りの床に叩き付けていた。時ならぬ雷のような激しい音をたて、受話器が転がった。

それでも電話の相手は切らないでくれたようだ。握り直して耳に押し当てると、受話器の向こうで身構えるような気配が伝わってくる。

「もしもし」

「——私です」

一瞬、受話器が壊れなかったのを後悔した。

「どこの私かな。名前を言わなくてもすぐに分かってもらえると自惚^{うぬほ}れてるのは？」

「また酔ってるのね」

「どっちがだ。こっちはちっとも酔っちゃいない。二度と連絡しないと約束した相手に、電話をしない程度には」

「こんな時に、ふざけないで！」

こんな時に金切り声をあげる女ではなかった。少なくとも六年前は。

「お願いだから、真面目に話を聞いて」

今度は泣き声になっていた。叱責の次は涙の哀願だ。五日前、電話をするな、と一方的に言ったのは彼女のほうなのだ。私は辛うじて受話器を叩き付けるのを我慢して、努めて冷静に言葉を探した。「俺を罵って気が晴れるなら、二時間でも五時間でも付き合おう。だけど、それ以上のことは……」

「そうじゃないの。たった今、警察から電話があったの」

「警察？ あいつが家を出たからって、捜索願を出してたわけじゃないだろうな」

「違う。そんなことしてない」

「じゃあ、なぜ警察が」

涙をこらえているのが分かる、長い沈黙があった。

「竹脇が……病院に運ばれたらしいの」

「らしいって——何があったんだ？ あいつ、自分で連絡もできないような状態なのか」

「よく分からないのよ。どういうわけかあの、海に落ちたっていうの。車ごと海に……」
耳を疑った。反射的にベッドから起き上がっていた。

「……お酒を飲んでいたんですって」

めったに酒を口にする事のない竹脇にしては、普通では考えられないことだ。彼はアルコールに頼ることなく、何事も自力で切り拓いていけるタイプの男である。私と違って。

「それで……棧橋から海に……」

泣き声で、枝里子の言葉はほとんど聞き取れなくなっていた。受話器に落ちる涙の音が聞こえてくるようだった。

「警察が言うには、自殺じゃないかって。心当たりはないかって」

まさか――。

息を飲む。胃の奥で突き上げるものがある。

「本当に警察が自殺だって言ったのか。――もしもし。おい、枝里子」

竹脇が自殺――。

「なぜだ。なぜなんだ」

やり切れない疑問が口をついて出た。

おそらく、その答えは私と枝里子が一番よく知っている。

二週間前、私と枝里子は六年振りにベッドを共にした。七日前、それを知った竹脇は、妻を残して購入したばかりのマンションからバッグ一つで出て行った。私と枝里子が何度会社に連絡を入れても、竹脇は電話口に出なかった。事実、不在だったのかもしれないが、伝言を頼んだにもかかわら

ず、あいつからの連絡は今日までなかった。

これが、その返事だとも言うのだろうか。

受話器からは、絶え間なく枝里子の啜り泣く声が聞こえている。

酔いはとつくに覚めていた。

竹脇が運び込まれたのは、私の勤務先からも竹脇の勤務先からもそう離れていない、築地つぎの東京港湾病院だった。

深夜のタクシーを飛ばして私が駆け付けた時、竹脇はビニールの囲いの中で、機械の助けを借りて辛うじて呼吸を続けていた。

集中治療室のガラス越しに見る竹脇は、高校、大学とシングル・スカルで活躍した体格が嘘のように小さく感じられた。白いシートの中、何やら訳の分からない管やコードが、シャーレの中で培養された寄生虫のように竹脇にまとわりついていた。頭に重ねられた包帯の微かな隙間からは濡れた髪がのぞいていて、海から引き上げられてまだ時間が経っていないことを物語っていた。

その姿を、私と枝里子は医師と刑事に付き添われて確認した。

枝里子は脱色したジーンズに白いセーター、上に薄桃色のカーディガンを羽織っただけで駆け付けていた。ダークブラウンに染めた髪は、心の内を暗示するように乱れ、ほつれたままに任せている。そのいで立ちは、私の前では決して見せることのなかった『妻』のものだった。私がうかがい知ることのできない、竹脇との六年の暮らしがそこにある。

ふと私は、あれ以来三人が一堂に会するのが初めてだということに気が付いた。こういう形で、六

年振りに顔を合わせることに成るとは思いもしなかった。

私達をここまで案内した初老の医師が、枝里子の隣に進み出た。

「出来得る限りの処置は施しました。フロントガラスに頭から突っ込んだようで、検査の結果、左側頭部に血腫が認められますが、泥酔状態で事故にあったため、その周囲の血管が脆くなっている危険があります。手術を見合わせたのはそのためです。ですが、病状が安定して、仮にその血腫を取り除くことに成功したとしても、長いこと脳に酸素が回っていなかったことも推測できますので、百パーセント回復するかどうか……」

医師は言葉を濁して頭を振った。

枝里子は無言のまま、ガラス越しの視線を変えようとしなかった。だが、その先が、生死をさまよう夫を捕えているかどうかは疑問だった。化粧気のない顔は、全く血の気が失せており、ガラスの向こうの患者たちと遜色がない。

枝里子の代わりに、私は医師に質問した。

「つまり、どういうことなのでしょうか」

医師は困惑気に刑事たちを見回してから、私に視線を返した。

「えーと、あなたは？」

迂闊なことを家族以外の者には言えない、という警戒が見て取れた。

「友人です」

かつては。

「中学、高校からの親友でした」

嘘ではない。過去形だが。

確認を取って安心したのか、医師は大袈裟に頷き、威厳を保つかのように一つ空咳をした。

「何らかの後遺症が残るかもしれないということですよ」

「例えば？」

「そこまでは、まだ」

「助かることは間違いないのですね」

「どんな状況でも、我々は万全を尽くします」

なんの確約にもなっていない。

後ろに控えている三人の刑事は、早く事情聴取がしたくてたまらないのか、手帳を開いたままで待っていた。ふいに、若い刑事が「あっ」と小さく声を上げて、身を乗り出した。

振り返ると、隣にいた枝里子が、ぐらりと崩れるようにバランスを失った。

慌てて一歩足を踏み出す。小さな枝里子の体を抱きとめるのは易いことだ。スタイルのわりには、驚くほど華奢な体つきをしている。それはあの頃から変わっていない。

「大丈夫か、枝里子。しっかりしろ」

迂闊にも呼び掛けて、私は慌てて息を呑み込んだ。女性が倒れたというのに、医師と刑事たちは木偶の坊のようにつつ立っているだけだった。友人の妻を呼び捨てにしてうろたえる男を、珍しそうに見つめながら。

気まずい沈黙の中、ガラスの向こうから聞こえてくる人工呼吸器のふいごのような音と、

「あなたが悪いのよ、あなたが……」

うわごとのように繰り返す、枝里子の声だけが聞こえていた。

2

看護婦と医師によって枝里子は集中治療室から担ぎ出され、私は二人の刑事によって一階下の会議室まで拉致された。

「簡単にお話をうかがわせてください」

そう刑事は言ったが、言葉通りに済むとは思えなかった。でなければ、わざわざ場所を移して、事情聴取が行われることはない。

会議室は、私を萎縮させるには充分すぎるほど寒々としていた。窓も、飾るものも何もない室内は、取調室に打ってつけた。

「月島署捜査一係の板倉です」

私と同年配の刑事は、パイプ椅子に腰を落ち着けるなり、ラッキーストライクに火を点けた。深夜にもかかわらず明らかに仕立てと分かるスリーピースを着こなし、撫でつけた髪に乱れた様子は微塵もない。最近あちこちでよく見掛けるようになったタイプの男だ。この手の男が刑事にまで増殖しているとは知らなかった。

氏名、年齢、住所、職業を、私は聞かれるままに答えていった。板倉刑事が興味を示したのは、私の勤め先を聞いた時だった。

「ほう、検疫所にお勤めですか。確か、輸入食品の検査をしているところですよね」

激務に忙殺されているであろう刑事にまで知られるほど、検疫所は有名になっているようだ。これも、昨年末に竹脇がものにしたショッキングなスクープのせいである。

昨年の十二月二十二日、『週刊中央ジャーナル』誌上に一つの告発文が掲載された。輸入食品検査センター副所長の篠田誠一と、竹脇の共同作業による『放射能汚染食品の三角輸入』の記事である。

それは一九八六年四月に発生したチェルノブイリ原発事故の影響で放射能に汚染された食品が、不正に輸入されて、日本の食卓に上がり込んでいた、という衝撃的なもので、クリスマスを目前に控えて浮かれ気分だった世間は、思いもかけない事実地震えあがることとなった。反響は凄まじく、新聞、テレビ、週刊誌は、こぞってこの問題を取り上げ、輸入食品の検査体制に関する論議が各地で沸き上がった。その矢面に立たされたのが、私の勤務する検疫所である。広報担当である私は、その対応に正直疲れ果てていた。

板倉は灰皿に煙草の灰をたたき落とした。

「あなたがこちらに見える前に、奥さんからお聞きしたのですけど——竹脇さんは先月の二十六日の夜から家を出ていたという話ですが、そのことは勿論ご存じでしょうね」

痛いほどに。

「理由は聞いておられますでしょうか？」

「竹脇は——」

質問には答えず、私は訊いた。その前に、確かめずにはいられないことがある。

「自殺だというのは間違いないのでしょうか」

なるべく平静を装って尋ねたつもりだ。だが、板倉刑事は相手の心を見透かした読心術者のよう

に、唇の端を微かに歪めて私を見た。

「目撃者が三名ほどおりました。彼らの話を総合しますと、まず間違いないものと」

「詳しく教えていただけませんか」

板倉は顎の先で小刻みに頷いた。構いませんよ、と言ってシステム手帳に視線を落とす。

「場所は、晴海埠頭の東詰め付近。目撃者は、栈橋に車を乗り入れていた若い男女と、そこから二十メートルほど離れた倉庫の守衛です」

万一の事故を防ぐため、東京港のすべての栈橋は関係者以外立ち入り禁止となっている。栈橋へつながる道路は、手前で黄色に塗られた鉄柵によって仕切られて、形の上では封鎖されている。だが、鉄柵が可動式であるため、勝手にそれを動かして栈橋内にまで車を乗り入れる熱心な見学者が跡を絶たない。

「車は最初、非常にゆっくりとした速度で海に向かって走っていたそうです。栈橋の縁から二十メートルほどの距離で突如スピードを上げると、高さ十二センチほどの車止めを乗り越えて海へと飛び出しました。あつという間の出来事だったといえます。ただ、シートベルトが壊れていたのと、海面に衝突した時フロントガラスが割れたのが幸いしたんでしょうね。まもなく浮かび上がって来た竹脇さんを、後から駆けつけた人が海に飛び込み、救助しました。消防に連絡が入ったのが、その直後の一時二十一分。病院に駆けつけた警官が、内ポケットにあった免許証から身元を確認し、奥さんに連絡を取ったというわけです」

「酔っていたために、アクセルとブレーキを間違えたとは考えられないのですか」

「血液中のアルコール濃度から見て、かなりの酩酊状態であったことが分かっています。運転を誤っ

たことは充分に考えられるでしょう。ですからね、羽川^{はながわ}さん。仮に自殺でなかったとしても、めったに酒を口にしなかった竹脇さんが、その日に限ってそれほどまでに酒を飲んだ理由がどこにあるのか、も我々は知りたいのですよ。お分かりですか？」

出来の悪い生徒を小馬鹿にしながら、世間の常識を言い聞かせようとする教師のように、彼は言った。私は、聞き分けのよい生徒のように頷いた。

「竹脇さんが家を出た理由ですが、ご存じでしたら、ぜひうかがわせていただきたいのですが」
知らないとは言わせない、と言うように、くわえ煙草のまま、ずいと顔を近付ける。

ごく簡単に、事の成り行きを説明した。六年前のことを省き、表面上のことだけを。

二人の刑事は眉ひとつ動かさずに私の言葉を聞いていた。先程の集中治療室での一件から予想された通りのことを、私が裏付けただけなのだろう。自殺の原因＝痴情のもつれ。頭の中でメモするのが見えるようだった。

「そうですか。奥さんから別れ話を持ち出されて、竹脇さんは家を出たのですね」

「いえ、彼女は別れ話を持ち出してはいないと思います」

「違う？」

「その場にいたわけではないので確かなことは言えません。ですが……、彼女は、その……私と親しくなっても、竹脇と別れるつもりはなかったと思います」

「すると、あなたと枝里子さんの間では、まだ一緒になるというような具体的な話は出ていなかったのですね」

それどころか、竹脇が家を出た五日後に、会うのはもうやめようと言われていた。

「となると、竹脇さんのほうで、奥さんとあなたの関係を問いただしたんでしょかね」

おそらく竹脇は、私達の関係に気付いてなかったはずだ。私と枝里子がうまく事を運んでいたからではない。例のスクープをものにして以来、竹脇と篠田は自宅に帰る暇もないほど多忙だった。取材過程を綴った単行本は今もベストセラーに名を連ねている。だから私は、枝里子に近付くことができたのだ。

「いや、そうになると、自分からなぜ家を出たのかが分からないか」

独り言のように言って、板倉は隣の若い刑事を振り返った。夫に浮気を指摘されれば、家を出るのはどう考えても妻のほうである。

「そうでもないんじゃないやありませんか」

若い刑事が、ぼそりと言った。

「なぜだね」

板倉刑事の問い掛けに、彼は躊躇するように私を見た。その視線で彼の言いたいことが手に取るように分かる。

——妻の浮気相手が中学時代からの親友だ、と知れば、誰でもショックで家にいられなくなりま
すよ。

心の声が聞こえるようだった。

その声は、板倉刑事にも聞こえたようだった。部下と私を交互に眺めると、やり切れないように視線をはずして、煙草の煙を吐き出した。

煙の向こうから、蔑むような四つの目が私を捕えていた。沈黙が棘とげのように私に突き刺さる。むしろ

ろ、「お前が海に突き落としたんだ」と、直接言葉にして言われた方がましだ。

私は友人の妻と関係を持った。彼女がかつて私の恋人だったことは何の理由にもならないだろう。私は竹脇を傷つけるのを承知で、と言うより、最初からそれが目的で、枝里子と関係を持ったのだ。

竹脇の背中を押したのは、間違いなく私だ。

「それで——」

長い長いインターバルの後、板倉刑事がやっと口を開いてくれた。

「竹脇さんが家を出たのを、あなたが知ったのはいつでしようか？」

「次の日です。彼女と会った時に聞きました」

早速次の日に会ったのか。目が驚いたように激しく瞬いた。

「枝里子さんは何と言っていましたか？ 家を出て行った時の竹脇さんの様子について」

「彼女が言うには、竹脇は驚くほど静かだったそうです。何を言っても全く無言で、黙って荷物をまとめ始めたといえます。それ以来、今日まで竹脇とは連絡が取れませんでした」

「すると、直接お会いになったのは」

「去年の暮れから会っていません」

「なるほどね」

会える訳がないだろうというように、板倉は何度も頷き返した。

「竹脇さんがよく酒を飲むような、行きつけの店は知りませんか？」

「あったとしても、あいつは付き合いで出掛けるだけで、ほとんど飲まなかったと思います。強そうに見えますが、酒はまったくダメでしたから」